

2023年12月 学院福音化 第1課

第一課の主題は、信仰と行いです。本文はヤコブ5章13節から18節までですが、今日は2章26節だけを読みます。

ヤコブ 2:26

からだが靈を欠いては死んでいるのと同じように、信仰も行いを欠いては死んでいるのです。

この箇所の最後の「信仰も行いを欠いては死んでいるのです」を見て、皆さんはどう思いましたか。どんな行いを言っているのでしょうか。いったい、どのように生きるべきなのかという気がしたでしょう。聖書が語っている「行い」とは何なのかを知るためには、先に「信仰」とは何なのかということを正しく知る必要があります。

信仰について

すでに、何度も学院福音化のメッセージを通して、皆さんに話を来てきました。先週のヘブル人への手紙の11章のみことばも「信仰」に関してです。「信仰」というのは、私たちから出てくるものではなく、神様の信仰、イエス・キリストの信仰が私たちに与えられるのです。もちろん、私たちは、なにかの対象を「信じます」と言うことはできます。しかし、聖書で語っている信仰というのは、単なる私の知識的、観念的な悟り程度を言うではありません。

実は、私たちは罪とがによって死んだ状態にある者です。以前には、そうだったということです。死んだ者は、なにもすることはできません。自分の意志を持って何かを信じる、行うということは不可能なのです。

聖書のことを私たちは、約束のみことば、契約の本だと言います。「約束」「契約」というのは、その漢字の意味を見ても分かるように、契約を成し遂げる対象同士が、しっかりと一つに縛られる、結びつけられるという意味があります。「約束」という漢字の「束」は「まとめて縛る」という意味があるでしょう。罪と死のこの地に、新郎であるイエス様が来られました。働き人へのメッセージの中にもあった、ローマ8:2「罪と死の律法」の中にあるこの地にイエス様が来られたのです。死んでいる花嫁である私たちを、ご自分の体と、しっかりと束ねて縛ってくださり、十字架の死に打ち勝ち、死からいのちへと、イエス様が飛び出してくださったのです。それが復活です。そこで、新婦である私たちは、イエス様とともに縛られていた状態で、死からいのちに出て来るようになっただけです。死んでいた者が、ある日突然、イエス様とともに生きた者となったということです。このように、神様の契約は、対象である私たちの行いを排除して、また否定します。何かすることはないということです。これが救いです。不可能な私に、無条件に不可抗力的に注がれたことです。

天の栄光を捨てて、神様であるイエス様がしもべの姿で、人となってこの地に来られました。そして十字架で死ぬまで、父である神様に対する信仰を最後まで守り抜かれたのです。神様もまた、ひとり子イエス様が、最後まで従順にされることを信じておられ、その方をよみがえらされました。この神様の御子に対する信仰、そして、御子イエス様の神様に対する信仰、その信仰が私たちに転嫁されたのです。それゆえ、信仰は、すなわちイエス・キリストを語っているのです。

おこな 行いについて

二つ目、「行い」とは何でしょうか。最初に言った信仰についての定義を覚えて、ヤコブの手紙が語る「行い」とは何なのかを見てみましょう。

「あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたの神である」と言われた、神様の信仰、これが旧約聖書全体に流れている契約の内容です。そしてイエス様は、「父がわたしに与えてくださったすべての者を、わたしが一人も失うことないように。そして、父がわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。」という祈りをされました。（参考：ヨハネ17章）そのように祈り、捕えられ、十字架を通して完了してくださった「信仰」、先ほど説明した2つ「神様の信仰」「イエス様の信仰」です。その信仰がある対象に注がれると、その対象から、必ずその信仰に導かれる痕跡が出てくるようになっています。それを「行い」と言うのです。もう一度言います。神様の信仰、イエス・キリストの信仰が、ある人に注がれれば、その人が導かれていく痕跡が現れるのですが、それを「行い」と言うのです。もっと簡単に言うと、信仰によって掌握されて生きて行く人の生活自体が、行いの生活なのです。

それでは、その導きの痕跡とは何でしょうか。神様のみこころに従順にして生きて行くようになることです。

イエス様が弟子たちに言られたみことば、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」（マタイ16:24）

また、ペテロには、次のように言われました。

「まことに、まことに、あなたに言います。あなたは若いときには、自分で帯をして、自分の望むところを歩きました。しかし年をとると、あなたは両手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をして、望まないところに連れて行きます。」（ヨハネ21:18）

伝道者パウロはこのように告白しました。パウロは、「福音のゆえに自分が持っているすべてのことをちりあくただと考える」と言いました。福音、キリストが、最も価値があることだからです。それゆえ、自分の肉的ないのちは、一つも惜しまないと言い、ただイエス・キリストと、その方が十字架にかけられたこと、それだけを私は自慢すると言いました。

それが信仰によって生きる人たちの「行い」の痕跡です。

そのように信仰による行いの生活を送った証人が、先週（学院福音化4課）に語ったように、ヘブル人への手紙11章の人々です。その人々の人生の結論はどのように出たと言ったでしょうか。ヘブル12章2節にあるように、イエス・キリストが十字架にかけられたことの信仰です。イエス様が生きたその生きざま、イエス様がかけられた十字架の生き方を、彼らが同じように生きたということです。

事実、神様のみこころに従順して生きるということは、そんなに簡単なことではありません。神様と私がひとつとなって、しっかりと縛られて一つとなるその過程の中で、私の肉的な自我は否定されて行き、一つ一つ、離れていくようにされます。生活で、一つずつ、一つずつ離れていくとき、私たちは、耐えられず、苦しい思いをします。皆さんそれが、実際的に経験しているでしょう。これまでの人生の中で、神様よりもっと価値を置いて生きてきたことが、どれほど多いでしょうか。いまも、知らずにそれを持って愛しているかもしれません。家族、夫婦、また、子どもたち。事業または自分の仕事、職場、また、お金や経済、健康などです。そうではないと言っても、私たちは、そのようなことに、私たちの心は、そこにもっと重きを置いています。そのようなものを、一つ一つ離して行くことは、神様を恨むほど、大変で苦しいのです。信仰の先祖たちは、そのような生き方を先に生きていました。

ヤコブ2章から

では、ヤコブ2章にもう一度戻って、いくつかの聖句を読んでまとめましょう。

ヤコブ2章14節

私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがないなら、何の役に立つか。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

神様から受けた信仰があると言いながらも、イエス・キリストを語る生活、イエス・キリストを現す生活をしていないならば、その信仰は、偽の信仰だということです。

15節

兄弟か姉妹に着る物がなく、毎日の食べ物にも事欠いているようなときに、

ここで急に飢えについての話をしています。信仰の行いについて語っているときに、なぜ、急に飢えの話が出たのでしょうか。これは肉的な飢え、飢餓を言っているのではなく、天の糧、靈の糧、すなわち、真理のみことばであるイエス・キリストがない、その飢えについて言っているのです。私たちみんなが、そのような状態にいたでしょう。神様のみことばなくて、死んでいるのに、肉的な飢えだけを解決してくださいと言っている場にいました。ある意味、強盗にあって死ぬようになったのと同じような生活でした。しかし、サマリア人であるイエス様、まことの隣人であるイエス様が生かしてくださいましたのです。

その言葉のあと、2章16節17節に、このように書いてあります。

16 あなたがたのうちのだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹になるまで食べなさい」と言っても、からだに必要な物を与えなければ、何の役に立つでしょう。

17 同じように、信仰も行いが伴わないと、それだけでは死んだものです。

そのように靈的に飢えた者たちに、本当に必要である靈の糧であるイエス・キリスト、福音を伝えることができなければ、それは死んだ信仰だと言っているのです。

私たちにないものは与えることはできません。ペテロが「私にあるものをあなたにあげよう。イエス・キリストの名によって、立ち上がり、歩きなさい」と言ったように、ないので「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹になるまで食べなさい」と言うことしかできないのです。それは、信仰自体がないので、その行いは死んだ信仰だということです。

18節19節

18 しかし、「ある人には信仰があるが、ほかの人には行いがあります」と言う人がいるでしょう。
行いのないあなたの信仰を私に見せてください。私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます。

19 あなたは、神は唯一だと信じています。立派なことです。ですが、悪霊どもも信じて、身震いしています。

18節19節にはもっと厳しい表現で言っています。

本当のいのちのみことば、真理のみことばであるイエス・キリストを与えることができるのか、できないのか、それは、体で、生き方で、イエス・キリストの生き方を生きているのか、そうでないのかということです。なのに、そのようにあるかのように生きていくこと、行いがないことが、すなわち悪霊の信仰だと指摘しているのです。

少し難しいのですが、皆さん、自分でよく黙想してみてください。

私が与えることができるのか、できないかということが、結局、私の生活がイエス・キリストの生活を送っているのか、いないのかということを語るのです。それは、先ほど語った信仰で話せば、私が神様がくださった信仰に掌握された生活を生きているのか、生きていないのかということです。ですから、そのように掌握されていなければ、与えることができないでしょう。それが行いのない信仰だということです。そのように行いのない信仰を、悪霊の信仰だと言っているのです。

21節

私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇に献げたとき、行いによって義と認められたではありませんか。

信仰という単語のラテン語は「クレド」という単語です。よく聞いているでしょう。「クレド」という元々の意味は、「心臓をささげる」という意味です。(10年前に見た日本のアニメーションで進撃の巨人というのがあったのですが、そこに胸を打ちながら心臓をささげると言っている場面がありました。)

神様の信仰がアブラハムに与えられたとき、その信仰がアブラハムを自分の息子の心臓に刀を刺す場であるモリヤ山に連れて行ったということでしょう。信仰が、アブラハムをそのような行いの場に連れて行ったということです。アブラハムにとってイサクというのは、自分のいのちと同じ者でした。その場が、結局、アブラハム自身が自分の心臓に刀を刺す場であったのです。その信仰によって、その場に導かれて行ったアブラハムの信仰を義と認めてくださったということです。

22節から 24節

22 あなたが見ているとおり、信仰がその行いとともに働き、信仰は行いによって完成されました。

23 「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。

24 人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことが分かるでしょう。

この 22節から 24節が理解できるようになったでしょう。ちょっと理解が難しい方は、また最初から 10回ほど聞いてみてください。

行いということは、私から出るものではないということが理解できれば、すぐ理解できると思います。神様の信仰、神様によって導かれていく生活です。

最後に 25節です。

25 同じように遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したので、その行いによって義と認められたではありませんか。

カナンの軍人たちに偽りを話した瞬間、ラハブは死んだ者でした。唯一の神様、生きておられる神様が生かしてくださることを信じたのです。もちろん、その信仰は、神様がラハブに与えてくださったことです。参考にヨシュア記2章を見てください。

まとめたいと思います。

このように、行いのある信仰というのは、イエス・キリストと一つになり、イエス様自身が生きられた、自らを否定して十字架の人生に導かれる者たちの人生を指します。その生き方には、必ずイエス・キリストだけが現れ、そして証しがされるようになっています。

今月の働き人へのメッセージにもあったように、神様からあらかじめ答えを受ける生活なので、後に来るその答えを追いかけて行くのではなく、神様によって導かれて行き、当然、来るようになる、そのような生活を生きるようになるでしょう。

信仰と行いを正しく整理して、理解して、伝えることができますように。